

■園児と小学生が一緒に見学

小学校訪問は、第1〜2回は田主丸小学校だけでした。それ以降に他の小学校も回り始め、第8回は、町内7小学校全てを回りました。

隣接する保育所の園児も一緒にグラウンドで見学しました。大馬も子どもを脅かすように近寄り、先生を乗せて揺らすなど、大いにサービスしました。

ところが、平成4（1992）年から小学校で部分的な週休二日制が始まり、平

成14（2002）年に完全導入となると、小学校を回れなくなりました。

土曜日に当たった平成13（2001）年第9回。田主丸地区青年部長だった田中稔さんは「耳納の里も無かったし、どこを回ろうか、ほんとに困った」と回想します。結局、道の駅うきはまで行き、いつも午後に出場していた耳納の市に午前も出るなどして、演技の場を確保しました。

平成25（2013）年第13回で水縄保育所に急遽立ち寄ったのをきっかけに、

最近では保育施設を回るようになっていきます。

■30年間出続けた耳納の市

福岡県緑化センターで行われてきた田主丸の秋の一大イベント「耳納の市」もコロナ禍で幕を閉じ、虫追い祭りの参加も令和元（2019）年第15回が最後になりました。

虫追い祭りは、平成元（1989）年第5回から30年間ずっと耳納の市に出続けました。大観衆に囲まれて約40分間の演技

は、夜の川合戦に劣らぬほど気分が良かったそうです。指揮棒役も舞台でインタビュアーを受け、文字通りの晴れ舞台でした。

以前は、J A虫追いが無いスキ間の2年間、田主丸小学校が子ども虫追いを披露しました。

耳納の市の終了で、令和4（2022）年第16回の昼の部は、以前より1時間も短く

▼第10回川合戦で大馬転倒（平成16年）²⁷



▼川合小学校（平成4〜10年）²⁸



第5章 田主丸小の子ども虫追い 〜喜びと誇りで未来につなぐ〜

田主丸町にはもう一つ虫追いがあります。久留米市立田主丸小学校の「子ども虫追い」です。毎年運動会で披露されます。

子ども虫追いは、旧田主丸町農協の虫追い祭から遅れること7年、昭和59（1984）年に始まり、40年の歴史があります。地元有志で構成する「田主丸小学校虫追い保存会」が指導しています。

■田中校長先生の着任がきっかけ

昭和59年4月、田主丸小の勤務経験がある田中良夫校長が着任したので、勤務時代にPTA役員だった面々が歓迎会を開きました。その席で、着任記念に何かやろうという話になり「なら虫追いやるか」の一言で子ども虫追いが決まりました。

子ども達を教える組織「田主丸小学校虫追い保存会」が発足しました。メンバーは明治38（1905）年生まれ荒木正吉さんを筆頭に12名、戦後生まれの最年少会員だったのが現会長の北川正勝さんです。北川会長は農協虫追い祭第2回で人形の芯棒を担ぎました。父親の北川勝美さんは、農協虫追い祭第1回の演技を指導しました。

現在の保存会は50〜70代の10人ほどのメンバーです。

▼北川正勝会長



■馬が2頭も登場！

手塚太郎光盛と斎藤別当実盛の2体の人形も大馬も、子ども専用で作られています。5・6年生が担ぐことを想定して、昭和15（1940）年の虫追い資料にあった寸法から3分の2に縮小し、人形は90cm、大馬は長さ6mです。人形は本番用と練習用の2組あります。

大馬は本来、実盛の馬1頭だけですが、子ども虫追いは手塚の馬も登場します。開始当初は生徒数も多かったため、できるだけ多くの子を祭りに参加させてあげよう、との配慮からでした。

■虫追いを愛する地元の協力

人形と大馬の製作には地元の人が積極的に参加しました。木彫屋さんは人形の面を彫り、看板屋さんが顔や鎧の飾りを描き、竹を扱うのに長けた桶屋さんは馬の骨組みを

作る、といった具合でした。

平成8（1996）年に改修した時も、地元から材料の真竹を寄贈してもらったり、馬や人形の色の塗り替え、陣羽織の縫製してもらっています。

平成8年の時、人形は作り替えました。大馬は表面を張り替えたものの、中の骨組みは変わっていません。

鐘太鼓も、当初は鐘を田主丸中央商店街の上町（かんまち）、太鼓は田主丸町農協から借りましたが、現在は学校で持っています。

■昔は朝夕練習、今は授業と昼休み

以前は、授業時間以外で練習しました。平成18（2006）年だと、朝練習は2週間弱、夕練習は放課後に50分間の練習を4日間、保存会の方が指導しました。

『平成17年度福岡県児童文集』に紹介された作文に、田主丸小の矢野まやさんは「朝は、ねむいのがまんし、夕方は、遊びたいのがまんし、運動会で立派に演技をと思いが一生涯懸命練習した」と書いています。

今は、総合的な学習の時間という45分授業で練習します。令和6（2024）年は、運動会の約1カ月前から練習を始めました。北川会長をはじめ保存会の佐藤亨さん・松本典生さん（中舎館地区）、林田政晴さん・林田隆一さん（怒田地区）に、授業時間に来てもらって演技を習いました。

限られた時間ですから、テキパキ動かないと厳しい声が飛び、子ども達もピリッとした表情で練習します。子ども達は昼休み時間にも自主練習をします。

▼田主丸小学校運動会（令和6年）



なりました。演技をすぐ間近で見れる田主丸中央商店街や月読神社に観客が集まるようになれば、再び昼の部も賑やかになるはずです。

■会員数減少でも伝統は守る

昭和52（1977）年に第1回を開催しようとしたのが旧田主丸町農協の20代若手組織、パイオニアクラブでした。そして第1回から30代組織の青年部が大馬、パイオニアが人形方と鐘太鼓、と役割分担しながら演技してきました。

しかし、会員減少でその役割分担も維持できなくなりました。宮原知也さんがパイオニア会長だった平成16（2004）年第10回が、パイオニアだけで人形方をした最後の回となりました。会員は40名弱でした。

祭り全体の人数も、既に平成22（2010）年第12回の時点で、青年部とパイオニアだけでは足らず、当時の石井猛青年部長は、OBや田主丸商工会青年部にも協力を依頼、やっとギリギリの人数を確保したそうです。

現在では、さらに、J A吉井地区青年部やJ A職員、農業青年クラブ員にも協力してもらっています。

このようにとても厳しい状況ですが、田主丸地区青年部とパイオニアクラブは今後も、第1回に掲げた「田主丸の文化財を保存する」という精神で、全国で唯一の虫追いを守り継承すべく頑張っています。

また令和6年は、練習が始まると、学校で運動会通信「ライラック」を発行しました。虫追いの写真入りで紹介され、子ども達のやる気が伝わってきます。子どもが自分と同じ持ち場になって父親が喜んで、との親御さんコメントも。

子ども虫追いは、5・6年生の希望者ですが、希望多数だとクジ引きになります。北川会長も過去にお孫さんが外れて、教えられなかったことがあるそうです。

世代を超えた悲喜こもごものエピソードにも、子ども虫追いの歴史が感じられます。